ぶらり HITO 発見

生徒たちと共に学び ずっと 成長し続けたい



Plofile

東京都立大江戸高等学校
教諭
吉川 尭人（よしかわ あきと）さん

2022年度東京理科大学理学部第一部数学科卒業。大学時代は学園祭実行委員会や塾講師、エンジニアの長期インターンなど幅広い活動に取り組む。卒業後は都立高校教員となる。現在はチャレンジスクールで数学を教えながら、生徒一人ひとりに寄り添う教育を実践中。

7月のある土曜日。待ち合わせ場所に現れたのは、私の息子ほどの年齢の青年だった。

東京都立大江戸高校で数学教諭として教鞭を執る吉川尭人さん。教員になって4年目。趣味はギター。筋トレに励み、英語を学び、資格取得にも挑戦している。授業研究会にも積極的に参加し、休日も予定で埋まっていることが多い。

「今が一番充実しています」

そう語る表情は実に楽しそうだ。

東京生まれ。三人兄弟の末っ子。子どもの頃から好奇心旺盛で、成績は良かったが「先生にはあまり好かれないタイプだった」と笑う。そんな吉川さんは、なぜ教員を目指したのか。そして今、どんな思いで生徒たちと向き合っているのだろうか。

「足りない大人になろう」と思った

現在、吉川さんが勤める東京都立大江戸高校は、チャレンジスクールと呼ばれる学校の一つだ。中学校時代に不登校を経験した生徒や、さまざまな事情を抱えた生徒たちが学んでいる。教員として採用されたのは4年前。しかも7月の途中採用だった。通常、初任教員は学年を持たないが、吉川さんは欠員補充として着任したため、いきなり1年生の担任を任されることになった。

「最初は先輩教員の見様見真似で指導するだけの毎日でした」と振り返る。だが2年目になると、少しずつ自分なりの役割が見えてきた。

「生徒に足りない役割を担う人になろう」

チャレンジスクールには、一人ひとり異なる背景を持つ生徒が集まる。家庭環境もさまざまだ。そこで吉川さんは、生徒によって接し方を変えるようになった。時には兄のように、時には親のように、あるいは何でも相談できる大人として寄り添う。

特に力を入れたのが、生徒が学校に通い続けられるよう支えることだった。年2回の面談では生徒一人に1時間もかけて話を聴く。欠席が続けば連絡を取る。保護者とも話をする。3年間で保護者



幼稚園の卒園式にて



小学校3年生の写真。当時所属していたクラスの教育実習生とのお別れ会。


高校時代はダンス部で活躍していた。


ブレイクダンスにも挑戦。

や生徒にかけた電話は 2600 回を超えた。

「もちろん全員がうまくいったわけではありません」

そう語る表情に気負いはない。ただ、生徒たちが高校卒業後も自分の力で生きていけるようになってほしい。その思いだけは一貫している。

思わず「熱血教師なんですね」という言葉が出たが、吉川さんは否定する。

「生徒のためにがんばっている、という感覚ではない。自分がやりたかったからやっただけなんですよ」

ここに、吉川さんの独特な教員観が垣間見える。

「教える」のではなく「一緒に学ぶ」

吉川さんの話には、「生徒のためにがんばる」「生徒を導く」「生徒の成長を見守りたい」といった、“良い先生”なら言いそうな言葉が出てこない。それどころか、そうした表現に、どこか距離を置いているようにすら見える。

「生徒を導いている感覚は、あまりないんですよ。それよりも、一緒に勉強している感覚に近いですね」

もちろん教師として知識や経験の差はある。しかし、生徒一人ひとりの考え方や価値観に触れる中で、自分自身も学んでいるという感覚が強いのだという。

そんな吉川さんが大切にしているのは、「依存させないこと」だ。チャレンジスクールの生徒たちの中には、大人が寄り添うことで安心感を得る生徒も少なくない。しかし、それが教員への依存になっては意味がない。

「(学校が楽しいから) 卒業したくないと言われるのは、あまり成功だと思っていないんです」

普通なら教師冥利に尽きる言葉かもしれない。だが彼は違う。卒業とは、自分の足で次の場所へ進むこと。居心地のよかった学校にとどまって安心したい、という状態は、本当の意味で自立できていないとも言える。

「理想は、“大人の飽食状態”をつくることですね」

吉川さんらしい独特な表現の意味は、「一人の先生だけに頼るのではなく、家族や地域の人、学校の先生など、さまざまな大人と関われる環境がある方がいい。頼れる大人がたくさんいて、その中から自分で選べる状態こそ健全だ」ということ。だからこそ吉川さんは、生徒にとって必要な大人であろうとする一方で、自分だけが特別な存在になろうとはしない。

「生徒には、私だけでなく、すごい大人にたくさん出会ってほしいんです」

飽きっぽいから教員になった

では、なぜ吉川さんはこのような教員になったのだろうか。意外なことに、その答えは「子どもが好きだったから」でも、「憧れの先生がいたから」でもない。

「実は、自分でもよく分からないんです」と笑う。

教員になろうと思ったのは中学生の頃だった。しかし、明確なきっかけを問われると首をかしげる。

子どもの頃の吉川さんは、成績は良かったが、授業中に授業とは関係のない発言をし、周囲を笑わせることが好きな、“お調子者”だったという。そんな少年時代に大きな影響を与えたのが読書だった。

歴史小説や人物伝を読み漁り、中学生の頃には沢木耕太郎の『深夜特急』にも夢中になった。この本は、26 歳の著者が仕事を投げ出し、インドのデリーからイギリスのロンドンまでバスを乗り継いで一人旅をする紀行小説だ。吉川さんは、未知の世界を旅しながら、自分の道を切り開いていく著者の姿に強く惹かれたという。

「自分で深く考えて行動する“賢い大人”の姿にあこがれて自分もそうなりたいと強く思いました。それまでは、思いつきで生きてきた単なる野生児。でも、あの時から自分の中で何かが変わった気がします」

そして、その頃から数学の面白さにも惹かれていく。

理由はシンプルだった。

努力した分だけ力がつくことが実感できる。さらに、別々に見えていた単元同士が思わぬところでつながる。その発見が面白かった。そして何より、「飽きなかった」。

この「飽きない」という感覚は、後の進路選択にも



大学時代は文化祭の実行委員として局長や副委員長を務めた。



大学４年時。数学科の仲間たちと。右から３番目が吉川さん。

今、生徒ごとに距離感や役割を変えている原点は、この頃の経験にある。

もう一つ、大きな出会いがあった。

教職教養の科目を指導されている竹村精治先生である。元都立高校校長でもある竹村先生は、吉川さんにとって大学時代から現在まで続く恩師の一人だ。

竹村先生の授業で模擬授業を行う機会があった。多くの学生が改善点を指摘される中、吉川さんだけは「特に言うことはない」と言われた。これを「最低限のレベルはクリアしている」ということだと控えめに受け止めたが、教師としてやっていけるかもという自信になった。

さらに竹村先生の紹介で、本来は学生は参加しない、東京都数学教育研究会にも参加するようになった。そこでは現職の教員たちが集まり、授業づくりや教育について熱い議論が交わされていた。その輪の中に吉川さんは、飛び込んだのだ。その他にも都立高校へチューターとしての学習支援にも参加し、大学の講義だけでは見えない、教育現場のリアルな課題や工夫に触れることができたという。

振り返れば、理科大時代に得たものは数学の知識だけではなかった。教育を語り合う仲間。背中を見せてくれる先輩。そして、自分の可能性を信じてくれる恩師。そうした人たちとの出会いが、少しずつ吉川さんの教員観を形づくっていった。

自分の中にロールモデルを４人を飼っている

吉川さんに、「これまでの人生で影響を受けた人は」と尋ねると、少し考えた後でこんな答えが返ってきた。

「4人いますね」

しかも、その４人について語るとき、彼は独特な表現を使った。

「自分の中に、その人たちを飼っているんです」

何かを決めるとき。迷ったとき。壁にぶつかったとき。その人ならどう考えるだろう。その人ならどう行動するだろう。そんなふうに、自分の中にいる４人に問いかけるのだという。

１人目は、東京理科大学の学園祭実行委員会で出会った同級生だった。圧倒的な処理力と行動力を持つ人だったという。思いついたことをすぐに実行し、人

大きく影響している。

「一つのことを極めるタイプではないんです」

興味を持ったことは、まずやってみる。面白そうなら続ける。そこから何かを学ぶ。そんな姿勢の方が自分には合っていたという。

だからこそ、高校教員という仕事にも魅力を感じた。

大学受験指導がある。就職支援がある。部活動もある。学校行事もある。生徒一人ひとりに異なる関わり方が求められる。常に勉強することが求められる。だから、

「高校教員って飽きないんですよ」

吉川さんはそう言う。

話を聞いていると気づいたことがある。

それは、彼が昔からずっと「成長できる場所」を求め続けてきたということだ。生徒を教えるためだけではない。自分自身も学び続けたい。そんな思いが、今の教員という仕事につながっているように感じられた。

東京理科大学で出会った人たち

自分自身も学び続けたい。その思いは、東京理科大学での学生生活の中でさらに強くなっていった。

とはいえ、勉強漬けの大学時代だったわけではない。

学園祭実行委員会に所属し、塾講師のアルバイトをし、数学の授業研究会にも参加する。興味を持ったことには、とりあえず飛び込んでみる。そんな学生だった。

大学時代の経験の中でも特に大きかったのが、塾講師のアルバイトだった。そこで初めて強く実感したのは、「生徒は一人ひとり違う」という当たり前の事実だ。

同じ説明をしても伝わる生徒もいれば、伝わらない生徒もいる。同じ言葉でも励ましになる場合もあれば、逆にプレッシャーになる場合もある。

「結局、相手によって接し方を変えなければいけないんですよね」



教員になって初めての卒業式。無事に卒業まで見送れた安堵より感無量の表情を浮かべている。


授業中の吉川さん。「生徒が興味を持てる面白い授業をやりたい」と、自ら解説用ソフトを作って授業をすることも。

を巻き込み、物事を前へ進めていく。吉川さんは、その姿を間近で見ながら、「まずやってみる」という姿勢を学んだ。

2人目は、大学時代にアルバイトをしていた飲食店で出会った3つ年齢が上の店長だ。当時は厳しく、理不尽だと感じることもあった。それでも今振り返ると、自分の人生を大きく変えた人物だという。「今の状態で満足するな」。そんなメッセージを、言葉だけでなく行動で示し続けてくれた。問題を見つける力。改善する力。合理的に考える力。筋トレや資格取得、英語学習を習慣化できるようになった背景にも、その先輩から学んだ考え方が生きている。

3人目は、教員になって最初にペア担任を組んだ還暦を超えた先輩教員だった。チャレンジスクールの生徒たちにどう向き合うのか。どこまで寄り添うのか。どんな言葉をかけるのか。保護者とどう関係を築くのか。吉川さんが2600回を超える電話をかけ、生徒たちと向き合い続けた背景には、この先輩の存在がある。

そして4人目は、現在の職場で出会った数学科の同僚だ。とにかく頭が切れ、思慮深い。知識量も発想力も桁違いだという。何かに悩んだとき、その人に相談すると、自分には思いつかなかった視点を示してくれる。「この年齢になっても、教科書にできる人が近くにいるってすごく恵まれていますよね」。そう言って笑った。

吉川さんは、自分一人の力でここまで来たとは考えていない。人から学び、人を真似し、人の良いところを吸収しながら少しずつ成長してきた。だからこそ、生徒たちにも多くの人と出会ってほしいと思っているのだろう。

教師が答えを与えるのではない。さまざまな人との出会いの中で、自分なりの答えを見つけてほしい。

そんな願いが、彼の教育観の根底には流れているように感じられた。

今はまだ、自分探しの途中

「今後はどんな教員になりたいですか」と尋ねてみた。すると吉川さんは少し考え込み、意外な答えを返した。

「実は、まだよく分からないんです」

管理職を目指したいわけではない。かといってほかに明確なキャリアプランがあるわけでもない。今も、「種まきの時期」だと思っているという。

最後に、高校生へのメッセージを聞いた。

「人は具体的な助けがなくても、味方が近くにいると知るだけで強くなれると思うんです。だから、自分の周りには気にかけてくれる大人が必ずいると信じてほしい。そして、どんな大人とでも対話をしてみてほしい。無理に賛成する必要はない。でも、話を聞いてみることで人生が広がることがあるはずだから。最後に、人生は楽しいよ！と伝えたいですね」


最近始めたギター。休日は練習に余念がない。

取材を終えると、吉川さんは時計に目をやった。この後は、ライブに向けたギターの練習があるという。

生徒たちと向き合いながら、自分自身も新たなことに挑戦し、学び続けている。彼の旅はまだまだこれからだ。

取材を終えて　フリーライター／石井栄子

とにかくユニークな人だった。中三のときには独学で数Ⅲを終え、苦手だった英語も猛勉強をしてTOEIC820点を取得。資格取得が趣味で応用情報技術者、統計検定に合格済。驚くべき集中力。人への感謝を忘れず、若い世代に「恩送り」をしたいという言葉が印象に残った。